



松村春輔編輯
 近世櫻田紀聞
 貳輯
 下

13
 3307
 4



3507
4

春雪 奇談 近世櫻田紀聞卷之四

東京寄留 松村春輔編輯

第九回

再説 関鉄之助の外の妻の女のありける烈婦阿ののの情を告を
委を一をくを問をぬるふ東武神田明神の麓をふて佐久間
町をとを喚を做を町号をに刻煙草と渡を並をして随分小賣も
繁昌をする故大並々を生活をける煙草屋喜助とりを昔
何をり夫婦をが中をに儲けたる花をのをと呼をる娘をありをこの
この

話
12
又

大正八年八月廿九日
本大學出版部贈

嬰日巳月二

年既く二八ある白貌さへ美人うつく且かつ兩親ふたご孝こころ
 近邊ちかの人ひと比賞ひやう稱なのふら娘むすめが所ところ為なとりみめあら
 私わたしどののが孝女こつにょの評判ひやうばんと美妙びやうべんの听きこへ雷名かみかる
 煙たばこ艸くさ不ふ好こう若輩わくぱいもも評判ひやうばん少女せうにょを看みん者もの
 店みせの出入でいりの客人きやくじんと人日ひとひ毎まい日にち繁昌はんしょうももりけるを
 満まんちるる世よの中なかの傲あうひと愚痴ぐちを往古むかしより謂習いひま
 一ひとたるる諺ことわざも今いまも我身わがみみ廻めぐり来きかの繁昌はんしょうの煙たばこ
 草屋くさや喜助きすけを風邪かぜの心地こころと臥蓐ふし病やまひの床とこの長煩ながわづらひひ

娘阿むすめあのの殊こと更さら小昼ちゆう夜心やこころと怠おろそか醫者いしやよ薬くすりと氣き
 と揉もく者もの病やまひ等閑とうかんもも私わたしども喜助きすけを彌病やまひつくと針はり
 灸しう薬治やくぢの甲斐かいあら終はつ又安政やすし三年さんねん丙辰ひょうしんの秋八月あき下げ
 旬身じゆんみはらりまくは母ははと阿あのの比ひ衰傷はうしやう悲愁ひしゆう今いまて阿あのの孝順かうじゆん
 の生なまみまあらむむ悲かなししも八入やちいあらむむ哀あはれれるる恁う而を復た
 近邊ちかの人ひとも喜助きすけが身みままりりと听傳きこええ俱ともは侮おろそそて集あ
 来きりり法はうの如ごとくは死骸しがいを菩提院ぼだいゐんに葬むすららひひ喜助きすけが
 女房にようばうも長病ながやまひの者もの病やまひ杯さかづきの勞らうををななららみみ野邊のべ送おくりりせせ

其夜より胸の痛との堪~~が~~として打續きつ伏床に
 枕~~も~~重くふる~~終~~は~~處~~女阿いのが孝心の看~~病~~等聞る
 ら~~祐~~ども夫喜助が一周日ふあとり終~~は~~えうあく~~做~~り
 ふける~~孝~~女の不幸空蟬の~~立~~を~~隨~~あ~~ぬ~~者あ~~り~~ま
 と~~憐~~う~~歎~~きの~~か~~さ~~あ~~り~~し~~と~~斬~~くりの~~誰~~う~~あ~~れ~~ま~~
 ざらん~~素~~より喜助が親屬と~~り~~ふ~~ま~~のも~~り~~ぎ~~ら~~より
 處女阿いのが~~只~~壹~~個~~刻烟草の~~商~~賣と~~做~~し~~て~~活業
 んやうもなく~~只~~過~~し~~日と思ひ出~~て~~涙の種と~~り~~る~~を~~

喜助が親~~し~~く交りたる~~刀~~屋清八と~~り~~る者~~の~~が~~使~~う
 親~~ふ~~離~~と~~其日~~這~~日の活業~~ふ~~も當惑~~做~~せる~~譚~~り~~を~~聞
 鍊~~之~~助が許~~を~~来~~う~~て語~~り~~し~~く~~鍊~~之~~助を~~孝~~女の~~薄~~命
 と~~憐~~う~~思~~ひ~~し~~郷~~を~~細君~~ふ~~り~~あ~~さ~~ま~~く~~欲~~せ~~ど~~い~~ん~~せん
 當時~~の~~武家の風儀~~堅~~くて~~高~~家の~~處~~女と~~要~~る~~を~~親
 屬~~同~~列の~~族~~ふも忌憚~~り~~多~~き~~ふ~~り~~ぎ~~ま~~が~~萬~~刀屋清
 八が~~周~~旋~~を~~任~~せ~~助~~筆~~の~~郎~~と~~途~~の~~程~~も~~遠~~か~~ぬ~~本郷の
 明店~~を~~賤~~ひ~~求~~め~~ま~~り~~阿~~い~~の~~住~~居~~せ~~~~ば~~何~~時~~も~~勤~~め

の暇間ある毎ふ必ず訪ひ来り遊樂ふもの許より
 孝女も是を鍊之助ふ仕へ貞操あらずといふ更ら
 間み随ひる田女あとの情客を祈りて美服を着飾り
 劇場の見物遊山の催し浮る所為のそ更ら見向
 もやうに且夕は只能く我身と慎と三年許りの春秋
 と夢の如くは過り来り既ぬ庚申は春のいのも廿歳ふ
 ありにけり然るふ三月朔日の夜より二日の夕部まが
 鍊之助の来りけりいのを頻り胸うち痛めつ是

元

はで四とせ立つ内一日も君が来ませ一更のあきと
 り日の非ざるふけり二日も音信のあきまを意易
 か私若千餘寒の烈き風邪でも召せぬこの
 ささきハ君侯の急用を閑暇を得させぬぬふ
 りん使と特きて郎内の安否を問は増由りんと思
 へども殊更み掟嚴重き郎内の御門の出入を知むて書
 簡を持せ遣使ふは亦違行りる時ハ君の御身も免り
 やせん免や角と氣を兼るその夜ハ伏床よりなげ

娘

嬰田紀聞一



五

孝女と
賞と衆人
門子群ふ

櫻田紀聞二



勘^{かん}も睡眠^{ねむり}を^な倣^{なま}さ^るけ^り其翌日^{あした}上巳^{じやうし}の節^{せう}々^々み^く雖^い
 の祭^{まつり}りのほ^みけ^{あり}賑^{にぎ}ふ家^{いへ}の^まり^るふ^も此日^{このひ}の^し殊^{こと}ふ大^{おほ}
 雪^{ゆき}み^く朝^{あさ}より積^{つも}る白^{しろ}雪^{ゆき}を^み實^み目^め覚^さき銀^{ぎん}世^せ界^{かい}結^{むす}
 一^{ひと}程^{ほど}ふ正午^{せいご}の頃^{ころ}より世間^{よこしま}一^{ひと}騒^{さわ}ぐ^く其取沙汰^{そのと}
 の區^{まは}々^々み^く這^この四辻^{よつた}那^な裡^ぢの門^{かど}口^{ぐち}委^{まか}し^き度^どの噂^{うわさ}あら
 祇^あん^んでも今朝^{けさ}の大^{おほ}變^{へん}の古^{ふる}今^{いま}稀^{まれ}ある椿^{つばき}事^{こと}あり
 交易^{こうぎ}得意^{とくぎ}ある井伊^い侯^{こう}を水^{みづ}戸^との浪^{なみ}士^しが一^{ひと}撲^{ぶく}を^な倣^{なま}
 て今朝^{けさ}御^ご登^{のぼ}城^{しろ}の折^{せり}と伺^{うかが}ひ櫻田^{さくらだ}御^ご門^{もん}で討^う取^とら^る天下^{てんか}

紙

の人^{ひと}ふ難^{なん}儀^ぎを^な免^{まぬ}罪^{つみ}の報^{むく}ひ^の恐^{おそ}い^い夫^おう^う浪^{なみ}士^しの感^{かん}
 心^{こころ}あり彦^{ひこ}根^ねの首^{くび}と採^とると其^{その}終^{しゆう}人^{にん}数^ずを纏^{まと}め^く細^こ川^{がわ}と
 服^{ふく}坂^{さか}侯^{こう}自^{みづか}訴^そ倣^{なま}たりと喋^{しゃ}々^々辨^{べん}々^々評^{ひやう}説^{せつ}の裏^{うら}店^{てん}ま^を
 由^{よし}置^おけ^きを阿^あの^の是^{これ}を^き所^{しよ}附^づ水^{みづ}戸^との浪^{なみ}士^しが同^{どう}志^し
 と諱^ごひ今朝^{けさ}も大^{おほ}老^{らう}井^い伊^いさ^なと討^う奉^{ほう}り^く一味^いの^{うち}内^{うち}
 若^わ亦^{また}且^{かつ}那^なも連^{れん}判^{はん}あり^く討^う死^しあり^く但^たし亦^{また}諸^{しよ}侯^{こう}方^{かた}
 へ自^{みづか}訴^そり^く人^{にん}を再^{また}び逢^あふ^り片^{かた}絲^{いと}の^{よう}て^ん緯^いの^あ甲^か
 變^かなり^ん此^こ程^{ほど}音^ね信^{しん}あり^くさ^らの^い意^いみ^く免^{まぬ}る^く憂^{うれ}思^しひ^は是^{これ}

不附ても井伊さなを討らりあり水戸方の御名と委し
 く軍あつたば且那も一味の内ありう恙まきを知る由ら
 ん座して物と憶いんより先家主と尋ね侍りて今朝
 しも有し櫻田の仔細を篤と叩むやと、~~迷~~路次門を走
 り蒐ねを表と往來ふ讀賣商人御覽とらるは是れ這
 度御評判あり野々櫻田御堀端陰居が鴨を採らる序
 次網の目とりり手疵の姓名陰居が組の姓名まぐ上下
 併せて詳明細に後とらるはと誂賣過ると喚とめく

遠

回青

手速く一葉買取て我家に飯り讀下すぬ十八人が
 姓名附第一番は大関和七郎を始めとして十二人目
 は関鉄之助と録してあると一眼看るより阿の唯
 悲しき過る気も轉動亂氣の如く見たりしが流石
 節操の女丈夫なるは僅は意とらる直し呼妾など
 世の中は薄命續く女もあつたは、~~両~~親み離きてより歎
 きの海の霧深く暗る日としていつくざう一は清八伯父が深
 切み末頼母さ且那の情憂身か中み、~~這~~程の意遣る

瀬のありともおりの夢り今日も亦昨日に変わる飛
 鳥川うき瀬ふよりに沈む身の果敢く愚痴を謂出ん
 より再び且那ふ逢れざる夏ふ倣り一は知りぬが
 生長らん何くせんし憶ひ詰たる烈女の決心恥て
 此の夜の明ると待受け同く四日の朝まどき近邊の人
 の起ざらうちよ身粧ひいて谷中なる菩提院へ赴き
 父母の墓ふ香華を手向馳と其傍ふ最目覚しく
 自殺倣せり高家も稀なる烈婦あつてまやみのが自殺

果たるる即ち三月四日なり、辞世の歌あり、
 墓の水留の上は怨めりり、
 花とんぐ、梅とんぐ、あやきやうえを、

この倣き此比叡の妻乃倣き

本文関氏の外妾の傳を尚書漏せし緯最長り然
 れども婦女男子と交へ終る時ハ例の小説読本の体裁
 と脱する癖を得ず、この編則の嚴重なるを以て編者
 亦私に犯し終ると悼る而已あり、そ必し官許あり

~~るどあまの是迄編者の失錯ありて能く其場合を
察せしむるなり本文の傳るる更ふ作意のな
き真説なりとせり茲も辨の申稟せり~~

再説有村治左工門を金子孫次郎。佐野竹之助。黒澤忠
三郎の三個を我家に待せし開が終ふ島津家仕へたる
兄有村雄之助の役郎に罷り来り辭より兄弟あるを以て
案内もなく玄関より進んで奥に通しうの雄之助の女房
へ響ひ出り是れ治左工門さぬ久し振あくる

よそ訪せりありし所兄さま
~~我夫は是れも治左工門の
奥の兄を思ひかくあり~~

日ハ幸ひ御非番ふて在宿あるを卒奥の間へと云ふ任
せて治左工門を姉ふも無支を悦し終り奥の居間ふ
入らん隔ての襖を押し開け雄之助の周章し読み
くりたる書付と手速く巻く懐中へ収めか治左衛
門も不審しく思ひるが襖をメる暫時音信做さ
り陳謝を做せ雄之助も其恙なきをいひて互に
隔てぬ中も治左工門今日水府の浪士が来意の趣き



林田
田
終
甲

本日 終 目 二

且つ大老の恨ありと云く彼の三個は同意あり事を為さ
んと決議のうへ是等の由を告んて来りて序次且つ
齋藤が認め一 大老撃殺の趣意書を採出委しく始終
と譚一かを雄之助の助の大い愉快素より恨あり井伊掃
部頭と討つる律我等も同意異議の速むは水府浪士
と志一我懐せ俱ふ力と盡さんと勇進んで答へしう治
左工門の當惑一 弁を御尤のやうな事ども私と違ひ
兄う人さぬの御高禄三百五十石と項戴在せしう大切

あり御身の上ありてこの度の度々止まりの何れも治左工門
小御任せ候へか一と緯と盡しく諫しう雄之助の首を
左右に打降りて否々今我浪士と謀り掃部頭と討ま
く欲まの暴政權威を悪む而已なり現在伯父の仇をば
俱ふ天と項りざらの怨敵あり然るに奈何や家禄を惜
て憶ひ止まる事や何れ是非と論せず同志とあり宿意
と果さで止むべきやと止まる氣色何れ治左工門
も其意に任せ兄弟遂に約諾做し陳治左工門の吟る

見月己月二

想時組降道下

やう同志残らず集會せん江戸町中ふせの忌憚多かり
依る愚案を廻き品川新宿なる山寄屋まで佳し
め且つ定日に来ル三月朔日大參會致すべ
の三個と談合做し置き侍りかば這の昔御心得た
まのるべしと私語を雄之助も品川を極めて妙
り陰に準備も致すべしと答て恥く酒肴を命じ兄弟
暫時献酬し稍盞を傾けらるる雄之助が一男雄太郎
女房も席に列あり俱ふ治左工門を饗應けり有徳程

治左工門の雄太郎と近く喫く天窓を撫つ吟けりや
う雄太も今年十三歳あるべし乱暴の時世に生れ合
ひなり十三四歳の幼少を初陣做し手柄を致
し名を後世に残すも是威君の御蔭を報る事を知
まふ豊み暮するも是威君の御蔭を報る事を知
まして虚々過すも天理を知らぬ人面獸心愧
の中あり耻ぞかし今も雄太の親御より伯父をも
あきむ氣も強くれ然れど武士の習ひあり今日存命

櫻日記開二下

活業とも明日の命を計りがごとく、
 這も是君がため
 ろくろば一身砕き、國恩を報ぜんとの故ぞうと自
 然の遺訓を雄之助も、
 治左工門の涙
 と催し、あをい辞もあき折か、
 女房の二個の顔うちま
 ぐめ先程よりの御咄、
 雄太郎へ御教訓うと思ひ
 一と所兄弟とも涙を浮め、
 御夏や
 未詳くこそ侍るまれと問、
 困まる治左工門の、
 何
 雄太の教訓より、
 往古の緯と思ひ合せ、
 計らば心ふ感

何れ

通し涙を催し、
 待りし、
 数盃の酒を項戴して、
 意愉快
 き餘りより、
 太く不禮と仕りたり、
 許せぬ人とお紛らせ
 雄之助、
 女房みむらひ、
 唯今咄の腰折、
 殺風景に成
 みけり、
 いま一品の好者と、
 梅へ御馳走せよと、
 吩咐り、
 女房雄太郎の二個も、
 勝手の方へ退き、
 けり、
 有村兄弟
 の頭と頭を附合せ、
 何れ私語、
 たり、
 治左工門の雄
 之助、
 みむらひ、
 先程私参り、
 折柄周章、
 御懐中へ
 隠し、
 御書、
 どの、
 如何、
 秘書、
 みく候ふ、
 ぞと

尋一々の雄之助のとり出は是なりけりと差出すを治
左工門の押項き開きえるに島津侯の御真書よて井
伊直弼ぬ一の暴政を強く惡まおさるの文章あり
あを治左工門を再三是と誦下し我君侯如斯きの御精忠
て勤王の御志一ありくくの細身粉骨の辛勞せらるも其
甲斐ありく有難しと弼勇む有村治左工門然らる来
る朔日ふの山崎屋ふく餘談を尽し事を一議み決せん
とふ中着の来りかたは是よりきこも四人あり頻ふ

あつた

あつた

酒と薦一うを治左工門も大酔あり其夜の飯りと急ぎ
て暇もして立さうける慈く復有村兄弟が伯父の敵
俱み天を項むとりのク一の仔細あるべき事ある有
村の伯父の温厚の大儒ありて氣節も随つて高かりたる
有志あるふより直弼主大老と倣り權威強暴ある振
舞ありて強く惡みて文も綴り詩も賦し大老が苛酷を
誅り一うを直弼主大いふ憤怒し縛して獄に下させ
しふ裁程もあく有村が伯父の獄中ふく身まかりたる

由この儒者の姓名素より名高うり入るべしと原
本みだも有村の伯父との録し書漏せり遺り惜
き更みよとさればふや有村兄弟が仇と謂敵といへ
るも理ありらる

第拾回

再説有村治左工門兼清の途を急ぎ其夜半麻布拾
番屋敷ある我邸ふ飯り来りしり佐野黒澤金子の
三個も今主人の帰りしと所開ぐ伏床を起出主

指さ

花

人の密語を喰んととみぞ治左工門を島津邸より兄雄
之助と譚議の序次且つ俱々不絆を謀り這度の同志と
做りたる趣き尚島津侯が御真書の事どもを逐一三個
不絆しりを喜ぶ絆限る弥餘談の繁りしりより春の
夜も明や早く速東雲のあみしりり件之三箇
昨日より召し合せ大支件を同志み斯と知らせん
と主人治左工門は別を告げ手別を候て諸共其
さす人として罷りけり有悠程は治左工門を三月朔日

とりのも 僅三四日の隙の而巳空しく日数と過る
 らや~~り~~先品川~~に~~集會の都合を為さん~~が~~急務な
 り卒品川の山崎屋許まかりて一義~~成~~托~~し~~飯~~ら~~んと
 品川~~さ~~て出行~~り~~此日~~の~~二月廿八日ありと然る
 有村~~の~~品川新宿の山崎屋某~~が~~家~~に~~到~~り~~家~~に~~
 あり~~し~~有村~~が~~恙~~き~~と悦~~し~~且~~り~~吟~~や~~久々の御光
 来~~り~~店先~~の~~恐~~ま~~あり卒~~ま~~が興~~へ~~と薦~~る~~と
 有村~~を~~押留~~め~~今朝~~の~~殊~~更~~用~~身~~あり~~し~~扱~~入~~ま~~さ~~りて

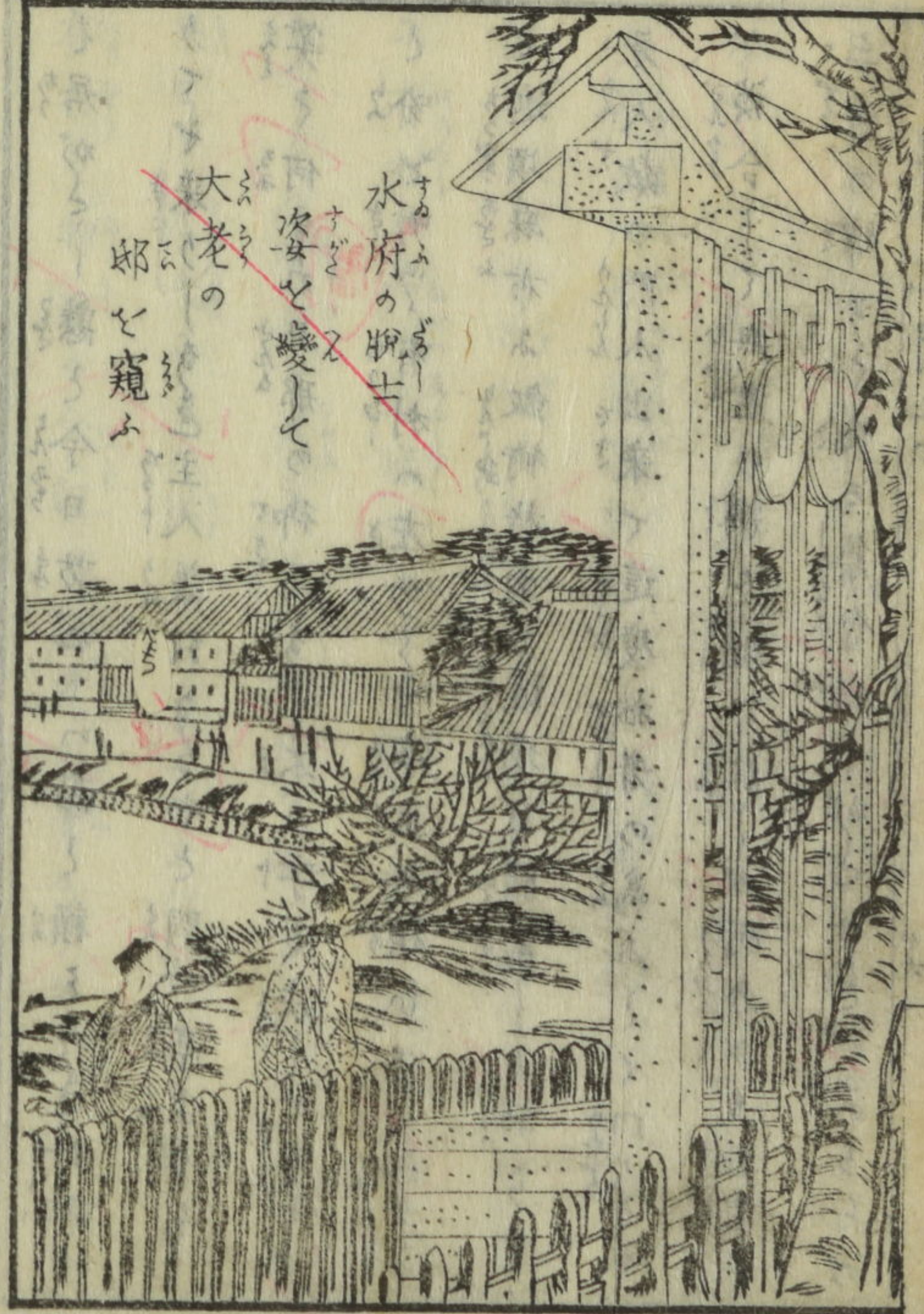
益

を居~~が~~と~~し~~態~~と~~今日訪~~ね~~の~~と~~頼~~ま~~な~~き~~仔細~~あ~~
 りてぞ来~~り~~主人~~兼~~引~~ぬ~~り~~や~~と問~~は~~亭主~~の~~あり
 笑~~と~~何~~れ~~且~~那~~の御用~~も~~不~~の~~字~~を~~決~~して~~申~~す~~
 と吟~~と~~有村~~の~~左~~り~~を亭主~~に~~頼~~む~~べ~~し~~拙者~~の~~
 由~~近~~頃~~麻~~布~~の~~鍛~~術~~指南~~の~~道場~~が~~開~~業~~し~~て~~計~~ら~~ず
 身~~人~~數~~の~~門~~人~~出~~来~~て~~這~~度~~拙~~者~~の~~為~~み~~とて~~門~~人~~と~~も
 が~~談~~合~~して~~無~~盡~~の講~~を~~儲~~け~~呉~~し~~何~~分~~も~~拙~~宅~~を~~
 手~~際~~の緯~~も~~徳~~る~~集~~會~~が~~と~~け~~ま~~は~~ち~~ら~~の~~

四海千萬國。吞噬
 互為君。誰知堯舜
 域。忽付犬羊群。警
 戒宜及時。天未喪
 斯文。々修武振日。
 一夫敵萬軍。



水府の脱士
 次女と變じて
 大老の
 邸を窺ふ



二階を借受り開き初會を多きく欲す期日の来ル朔
 日あり素より晴雨を論ぜずして朝より来會候まへ
 きまりと折り亭主の答ふりやう開の最易き御用を
 り併まぐ御人数の何人さまみ候ふやと問はる
 有村さればと莫約二十五六名三十名の内過さる
 べし尚亦當日二三種をうり佳肴の準備と持たれ
 人数の緯を前日ふ時とり調べ謂遣るべしといふ
 と亭主を受容りまへ有村もその日と約して別を免

一行

茲亦佐野竹之助が書遣りたる大和錦とりへる長歌
 あまの因ふりり録りて聊本文の餘情の候

大和錦

佐野竹之助藤原光明

天照らす神の宮居の神さびく伊勢津み引るいと車
 大和錦ふかりなせる其往古に御旗を五月蠅なま
 心も黒き夷等とみて近けりけがは皇御國の雲
 井まが巴が隨意々々婦ああら稱生半の事なれ
 金の光りも真心もまらうくとるがそ大宮人あ

身ミるグくハ五月サバ蠅ヘあハけケるウきトとモ雲モのウ人トまグ曇モ
 らセて赤き心の宮人ヲ捕ヘ尽シて東路ヲ田ヲ下シて
 武ム藏サシあル獄ト屋ノ中ニひキをあらル真マコ心ノ深シき人々トも
 何ニ悪クさまふとりあリて罪多シき罪多シきをひて親ノ罪ヲ
 とクらズ子ヲ遠キ島ノ根ヲ流シけル猶ホ春ノ雨ヲそノが
 ぬル鶯ノあらずで我ノ袖ヲあつるもとハわらぬと露ヲ
 ち拵らひ丈夫男ガ心ノ猛ヲとり直シ大浦浪ト生ヒ
 茂ル八重の薄ともぎ尽錦ノ御旗春風又吹ぬハじ

て梓弓ヲひき絞リはく夷等と千里ノ海ヲ退けて猶日
 の本み千萬ノ夷ノ國ヲ赤靡りせん

返歌

敷シキ島ノのふしき此レ御旗とちはらけ皇いくさノ魁ヤせん
 是レより下蓮田市五郎ガ本意を達せ後口吟和歌を
 掲出し優みやさしとういふ意我告まつらん而已

三月三日四日五日雪降る細川の郎ハ在りて五日の
 夕空晴て月影のさしけると見て

嬰日已開下

ぬりは、さる思ひの雪比まれて今あふ雲うき春の夜の月

隅田川の花いと盛あそ人々花見ふ出るういと聞

諸人の花見るさほまひまかへて嵐まつちの身ぞあつとあつ

三月廿七日よの日へ死ふ就事よとあり人ハ辞世の

歌よと侍る

色香をばよ野のおくふとああきく惜まふ散る山さうらう

花のちみ深く深み色香とべちりらん後ぞあふ句つらん

母とあひひて

たうちめよまよもあふせの関あぐねる間も夢ふ戀ぬ夜ぞうき

あそれより昼へひねり夜もすぐ胸もたふせぬ母のちみか

かろ間もついで袂の時雨うへ母とあひの泪あうけり

守人の櫻の花を一枝折ういだけりふ

守人のあふまよもあふ此春るなとさうらもいふなをえん

寄落花述懐

いながみどつり嵐のさけへきこ心せつく散るはつらう

立のちめと思ひはくせし事ども皆あうく

本白紙終尾二二

ありぬと覚へられれば悲憤の巧まりふ

丑のなれと思ひ盡せし真心を天津御神もみそまのすらん

是より下のめぐりの彼人々の歌どもと掲げ出しぬ

吾妻あり都の花をふりひて 齋藤監物一徳

あらくらのより野のさうらうあぐまの花を盛りあり

金子孫次郎教孝

まはかみ清きまゆの玉の緒の絶てしものをせりあぐま

君が為のなれつくままてらるる二荒の神のふんをまをす



天君のうき御心をやすめまのふらび國ふかしくざらま

手まうとがあそび袖をまがりつ迷ふ旅路のたが君が為

辞壺のよりふりある 杉山彌一郎

むさし野のつら咲きなん山櫻けいのつしみ散るる武士

身とすてきとみさぐるめつとる

森 五六郎

ぼゆの身とあり人の軽し花の雪散るべき時をまとなきひ

二筋ふありひをけん大和鉾かちて碎くる名のをまりけり

櫻白紙終尾二二

母とつて月るる度ふおのりなるつり屍のうへよてるやと
つとつとふ散るさうとやつひちちまど花のころと人のあはれふ
白又争飛雪斬仇酬主恩今朝吾事畢芳臭任人言

廣岡子之次郎

あぢきるや闇の夜いで武藏野の名とひろくと雪のうへまぐ

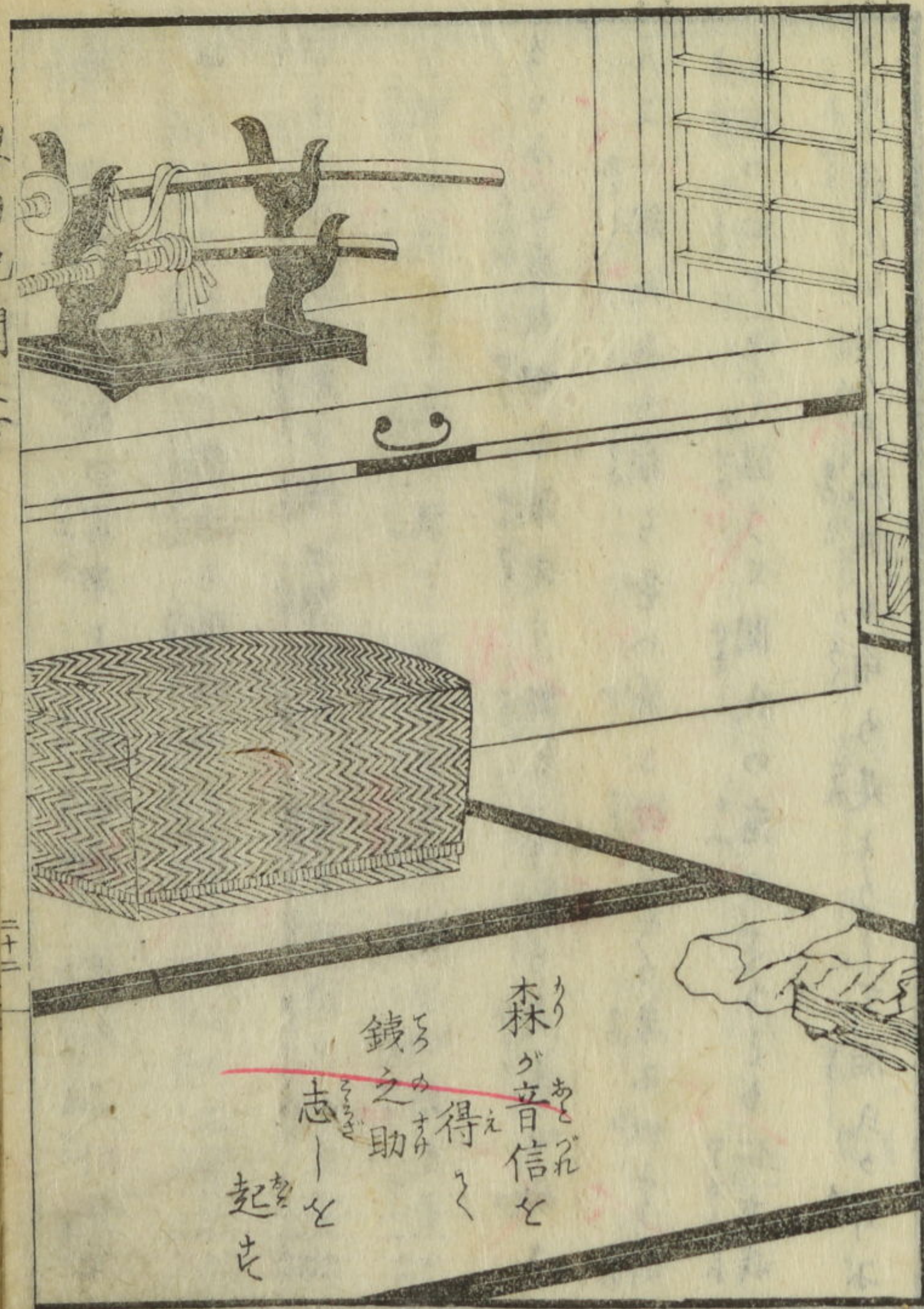
鯉淵要人鈴陳

くもすれを月の影のそちひくくて心と雲よなちまうりけり
國君のなめとありへばとめじ身はつぐまらの露と消とも

有村治左工門兼清

思か根もくさるさうめや武士の國のためや
君はさめはくせんわむさう時法野辺の若竹
右は録あり外は歌も詩も君くりきどり紙員まにかざり
ありて茲よ尽まを得ず開の第三編即五の巻の尻は満さ
間話体題さふ亦森五六郎の水藩ふ馬廻りと勤
役あり當年廿一歳めく願る強膽の猛者ありけり此程齋

別行 4



櫻日
 終
 隆
 二
 一

櫻田御門下

藤一徳等と上総の富津より乗船做一武州品川の浦
~~み到着~~一夫より諸方み潜伏做一つが小石川みあり
日ふと関鉄之助が緯と憶ひ出~~し~~我年頃鉄之助と友恒
と結ひ途こそ遠く隔たまども所謂る列頸の交り
~~る~~み~~這~~度故郷を脱走~~し~~斯をうりある大事~~を~~做さ
ん~~ふ~~一辞~~た~~ふも談らむ~~い~~義~~み~~返~~し~~たる者み似~~し~~我
交友の由を~~と~~謀~~り~~て関氏の應せざる~~とも~~仁亦我
を膚淺といもんや先鬼も角も是よりして関氏~~の~~許不

到るべ~~し~~と既~~に~~準備も~~も~~果~~し~~否~~や~~ま~~く~~関氏を
駒籠の御邸内~~に~~有~~り~~つる物を~~那~~裡へ到~~る~~極めて
悪~~り~~奈何~~做~~さんと考へ~~し~~這~~の~~亦便利~~なき~~緯~~を~~
り~~け~~り~~意~~利~~と~~る人を特~~と~~て書簡~~を~~送~~る~~の外~~も~~と
分別~~漸~~く確定~~り~~け~~る~~聴~~て~~書翰~~を~~書~~認~~め~~五~~六~~郎~~の鉄
之助~~が~~駒籠の邸内へ~~ぞ~~件~~の~~手簡~~を~~持~~せ~~り~~有~~徳程~~み~~関鉄
之助~~も~~獨~~り~~按~~に~~奇~~苑~~り~~頻~~り~~み~~書~~讀~~を~~做~~し~~け~~り~~折~~柄~~を~~
関~~み~~音~~信~~る~~聲~~の聞~~え~~し~~應~~と答~~て~~立~~出~~る~~み~~訓~~ね~~

櫻田御門下

櫻田

男おとこが腰こしを腰こしめて鉄てつ之助のすけさなと申まをすにこの這方こゝろさまうく
 在まきまり此御手紙このごてがしを小石川こいしがわより唯たださし一ひと封ふうの書簡てがみを鉄之てつの
 ら届とどけらまよと持もたれはしと一ひと封ふうの書簡てがみを鉄之てつの
 助すけと渡わたまりぞ受うけらるるまり表書うんがしを讀よみますま名宛なをての
 関鉄せき之助のすけ様さまと鐵てつと録ろくしてありま出先でまきの名前なまえを
 覚おぼへまき仁にまりけまば使つかひまむらひ此書簡このてがみを何人なんびとよ
 り持もたれしやと問たずねられしと思おもへば使つかひまむらひ何時いつの程ほどに
 う飯いりしといふら人影ひとかげだも見みへざれば鉄之助てつのすけの不審ふしん

く思おもひまがらも書簡てがみを持もつら興おこりしけし開ひきまるままり
 まり奈何表書なんがひうんがしの名な偽いつはり名なめし日頃ひごと文ふみ々々浅あくまるま森もり
 五六郎ごろうの手跡てあとあるま仔細しさいをあらわんと怕おそきまがら先ま
 讀よみます文面ぶんめんの

三文字

あらわらしきくまるま解とくまるま細こまからならず
 小川こがわよりしてし述のたまへしるま書かきますま
 るまりしてし國くに元もとはしりし授書じゆしよ系けい揮ひ調てうひしてし後のち
 早はや書かきますま後のち之の形勢けいせいを申まをすま通とほるま手紙てがし

除き集議を凝^こりて般同志と考^から
 多^{おほ}く後^ごに依^より當^{あた}りて潛^{ひそ}かに在^ある事^{こと}を
 親^{おや}友^{とも}と考^かえ一^{ひと}嘗^{かつ}て亦^{また}不^ふ申^{まを}す可^べし
 一^{ひと}度^{たび}は^はる^る事^{こと}を^を三^{さん}月^{げつ}程^{ほど}に^に行^いは^はる
 事^{こと}を^を決^{けつ}意^いと^と集^{しゆ}會^{かい}を^を行^いは^はる
 事^{こと}を^を必^{かなら}ず^ずに^に行^いは^はる^る事^{こと}に^に決^{けつ}心^{こころ}
 除^{のぞ}き^きて^て同^{どう}志^しと^と考^から^らず^ずに^に行^いは^はる^る事^{こと}に^に決^{けつ}心^{こころ}

こころ

二月廿九日

歳五六節

軍錢之助換

外下

讀^よ畢^ひり^には^は鑿^{たく}之^の助^{すけ}の^の程^{ほど}に^に行^いは^はる^る事^{こと}に^に決^{けつ}心^{こころ}
 告^つげ^を来^きて^て遣^はり^にたる^る實^{じつ}に^に親^{おや}友^{とも}と^と考^から^らず^ずに^に行^いは^はる^る事^{こと}に^に決^{けつ}心^{こころ}
 て集^{しゆ}議^{かい}の^の折^{せり}も^も熱^{あつ}々^々森^{もり}々^々吟^{いん}遣^はり^にたる^る事^{こと}に^に決^{けつ}心^{こころ}
 の機^は會^{かい}と^と謀^{まわ}り^に同^{どう}志^しと^と募^もり^に一^{ひと}舉^き事^{こと}と^と起^{おこ}す^る事^{こと}に^に決^{けつ}心^{こころ}
 我^{われ}亦^{また}命^{いのち}と^と惜^{おぼ}え^る事^{こと}に^に決^{けつ}心^{こころ}大^{おほ}事^{こと}に^に漏^もれ^る事^{こと}に^に決^{けつ}心^{こころ}

村田治左

手紙を巻きて手速く火桶に投込めを詔と燃たけむり
より軒端をくく~~倣~~り一かを今宵限りうきまぬ身の
別きと告んと外妾多るおいのが許ふ到り一り~~素~~より
関ヶ鏡石の堅き心の誓ひをばると~~て~~婦子ふ諱ふなき
その夜も例の如くあ~~く~~最睦ま~~く~~お伏~~く~~明~~く~~近
くあり一か~~ハ~~航~~く~~妾宅を立去りける~~この~~條下も外
妾の~~ハ~~諱の段と宜しく前後と読合せたまへべ
間活發案ふま~~く~~三月朔日ふま~~く~~一かを有村治左工

別

門より兼而同志に報知~~せし~~品川新宿山崎屋ふての會議
當日不到り一か~~ハ~~治左工門を素よりこの日の主人が故
衆より速く那裡に~~到~~り~~く~~同志の来集をあん待より
けり有徳とあらふ水府より~~この~~程府下は階を居たる人
々も今日決論をなさ~~く~~欲せば~~維~~一と遅刻ふ速ふ
べき午の具吹~~負~~ま~~く~~ふ山寄屋がり聚ひ来り一人々
あ~~の~~齋藤監物。佐野竹之助。黒澤忠三郎。山口辰之助。大
関和七郎。廣岡子之次郎。森五六郎。稻田重藏。鯉淵

上見

嬰日巳月二六

二十六

要人。関鏡之助。杉山弥七郎。森山繁之助。廣木松之助。金子孫次郎。海後磁磁之助。岡部千次郎。増子金六郎。蓮田市五郎。高橋多一郎。同莊左工門等。総て會する所の二十一
 名。小速比。かを儲けの酒宴を催して。稍一義を議せん
 とす。の時。治左工門が兄ありける。有村雄之助が未だまの
 席上。みゆらぐ。金子教孝。吟るやう。有村民御舎兄のいり
 あらん。最早来臨も。つるべき。あれども。使と。つる。橋へん。り
 いり。做さんと。私語を。折しも。嘿ふ。樓へ。登る者あり。是又

別人あり。て。薩藩有村雄之助あり。みぞ。知巳も。あらん。ぬゆ
 席を。禪。卒上座へ。と。奨る。銭。雄之助の。押と。め。開ぐ
 隨未坐。小附。より。是より。樓上。盛ん。あり。て。彼の。大支件
 と。決着。ま。り。や。来ル。三日の。手配。ま。ぐ。も。既畧。茲。不定。わ。詳
 ち。這。回。紙。真。み。か。ぎ。り。何。れ。は。第五の。卷。日。説。分。く。る。銭。聴
 祿。か。

附て。つ。本文。を。総。と。實。説。み。て。更。み。作。意。を。示。す。

春日巻之二

の中を折衷倣つる故随つて抄一の誤意あるを
 得る猶斯の如き拙作をのり所謂際物賣と目と同
 一あり論なき本屋の例の急ぎふまけ校合さ
 へも杜撰多し必しも編者一個の罪ありねを
 聊餘白小辨せらるるも元来無學薄識ふて恣る草
 紙と綴ると吟え噫往延き白癖者あるか那

春雪
 奇談
 近立櫻田紀聞卷之四終



明治八年十月十日出版

東京濱町二丁目十一番地寄留

著人 松村 春 輔

彌左衛門町四番地

東京書肆 出板人 武田傳右衛門

